

入来牧場繁殖雌牛の礎からさらなる維新へ

松 元 里 志
(農学部附属農場入来牧場)

緒 言

入来牧場は、1968年4月に、種子島牧場から移転・開設され現在に至っている。移転・開設以降40年以上にわたり、入来牧場では、豚、乳用牛、及び肉用牛など様々な家畜が飼養されてきた。このうち乳用牛は平成6年に、また豚に関しては平成19年に飼養を中止しており、現在では、肉用牛のみの飼養となっている。入来牧場の肉用牛はそのほとんどが黒毛和種であるが、一部には、口之島野生化牛との交雑種も飼養されている。現在、我が国での肉用牛生産現場では、その管理技術とともに品種・系統が重要視され、優良系統による高品質肉用牛生産が主流となっている。今後、入来牧場において高度な畜産教育研究を遂行するためには、高い能力を有した肉用牛を維持することが不可欠である。そこで、生産管理台帳・分娩記録簿をもとに、現在入来牧場で飼養している黒毛和種繁殖雌牛の系統的由来と今後の展望に関して検討した。

調査項目

入来牧場に保管されている1983年(昭和58年)以降の生産管理台帳及び分娩記録簿から現在飼養している黒毛和種繁殖雌牛の系統的由来(祖先)及び交配種雄牛を調査した。また、それらの経路図を作成し、今後の入来牧場における繁殖雌牛の保有及び子牛生産の展望を考察した。

結果及び考察

入来牧場では、開設当初から吉一・田安光の産子が飼養されていたが漸次売却され淘汰されている。昭和58年から導入がなされた52頭の中で、宝勝産子(5頭)、宝徳産子(3頭)、田安春産子(1頭)、忠福産子(2頭)、第20平茂産子(2頭)、隼信産子(1頭)の14頭は30年余もの間、入来牧場の繁殖雌牛の礎的系統となったと推測される。

交配種雄牛は、59年以前は、金一・金豊のストロー精液と、鹿屋金水号の自然交配であった。59年に、忠福、61年に宝勝、63年に第20平茂とその時代の代表的な種雄牛が交配されている。それ以降は、忠福、但馬福(但馬系)・宝勝、若藤、宏勝、第20平茂(気高系)藤花(岡山系)、宝徳(宝春系)と、鹿屋金水(栄光系)と多様化している。平成にはいと、第20平茂号産子(第5平茂・第22平茂)や鹿兒島の系統の礎の金水9号産子の金徳・富金・金澄・第15金水が交配される。平成4年から、神高福(忠福産子)糸藤(但馬系)が交配された。平成10年から再び松神による自然交配が開始されている。同時に、ストロー精液での交配も継続された。平成20年から全国和牛登録協会の登録制度に対応するための交配計画が実施された。しかしながら、当初、本原登録・基本登録を持つ繁殖雌牛が少なく血統の隔たりが大きかったため、肉質において実績のある牛の受精卵移植を開始した。平成23年からは、受精卵移植の交配種雄牛に、平茂勝(第20平茂-宝勝-福華5産子)、勝忠平(平茂勝-忠福-第20平茂)百合茂(平茂勝-神高福-忠福)安福久(安福165の9-紋次郎-糸光)隆之國(福之國-隆桜-第20平茂)金幸(金徳-

神高福－宝勝）忠茂勝（平茂勝－忠福－第20平茂）の交配がなされ優良遺伝子を保有する産子が確保されつつある。

入来牧場の移転・開設当初に礎となった繁殖雌牛には登録制度の本原・基本登録を持つ個体が数多く見られた。しかし、その後30年にわたり実施された自然交配による自家保留牛生産及び仔牛市場導入による肉牛生産によって、登録を持たない、すなわち市場価値の低い繁殖雌牛の割合が増加した。今後は、これまで培われてきた受精卵移植技術や通年放牧での繁殖雌牛飼養技術を活用しながら、さらなる維新を求め、繁殖雌牛の選抜をすすめる必要がある。昨年、第10回全国和牛能力共進会に参加し、研修できた事は、今後の入来牧場繁殖雌牛改良の指針となった。現在では、雄子牛の名号を、『北辰号』とし雌子牛の名号は、鹿兒島の地名で登記を行い、大学牧場銘柄牛及び繁殖雌牛系統の確立を目指している。これら、入来牧場で行っている取り組みに対しては、県、民間種畜場ならびに人工授精所から多大なご協力を賜っている。ここに深謝するとともに、今後の教育研究に優秀な繁殖雌牛供給できるよう努力していきたいと考えている。